

浪華使夫傳

壹

八  
冊

特  
遠 3  
966  
1





本清

遠  
966  
卷 1

讀此篇則指體頓活黑甜既醒剛  
 骨自生今而視古猶在具時以聞其語意  
 氣燥既切齒扼腕之狀溢乎篇外也好  
 事者以為談柄有俠骨者以為義鑒  
 則此篇豈多裨益於人哉云爾文化  
 四年歲在丁卯蒲月竹醉日書  
 速高麗橋畔儼居東窻標梅飽雲雨  
 點井之霞

丁卯



江戸

蘭洲外史



浪花使夫傳總目錄

全本六冊

初卷

發端  
 谷軍兵衛苛政の語  
 石堂刑罪石堂強勇の語  
 石堂船越助の語  
 越良介強盗の謀の語  
 越良介強盗の仲間の入る語

一冊目



牧谷石堂を討つて退る語

貳 卷

仲間庄兵衛大道寺と毒殺の語

黒船忠右衛門の語

金子大兵衛強盗の逢ふ語

朝比奈藤兵衛の傳

夏子身成賣の語

喧嘩屋五郎右衛門の語

両雄獄門と取逃の語

船越鐘浪花へ出る語

三 卷

神壽の喧嘩の語

筑紫權六鎌倉へ趣く語

同三千兩とく語

權六金兵衛と助る語

朝比奈怪兵小逢ふ語

大和牧谷兵助の計る語

牧谷兵助の殺と語

兵助女房契情の語

四 卷

根津四郎右衛門女盗賊の捕る語

杉谷伊兵衛刀の語

杉谷女房入牢の語

清十郎狐化の語

原田藤兵衛權六密計の頭と語

金兵衛權六と名乗る語

牧谷軍兵衛上京の語

田舎危難の逢ふ語

五 卷

秋田城之介仁政の語

金助小万使客と成る語



田毎自害の語  
 移谷軍兵衛庄兵衛の逢語  
 喧嘩屋五郎右衛門怪力の語  
 使客来山の語  
 六卷  
 三人吉事と告の語  
 清十郎復讐の用意の語  
 高雄の紅葉狩の語  
 復讐時々の語  
 清十郎出世の語  
 五人使客権六逢語  
 使客痛切の語  
 五人の使客跡公隠の語  
 目錄畢

俳諧師来山



遠番古登毛

池賀祢能波那也

美富波加里

十萬也

見事

十一



喧嘩屋五郎右衛門



大留濟下方化明侯骨香  
衆人所占照忠雄森者芒

西湖

貞節人  
所立忠  
節世所  
交海



奴八万



葵之俠忠  
漏羅不惑  
東帆

鐘之太兵衛



芳賀美濃記  
一巻



根津四郎右衛門



美之如左  
致高如毛  
久海

孰義無愛身  
止嘉示自成  
古規





傾城瀧川



たのひーさかまはこれかみうきつ  
かゝりさくはれりてく

石堂清十郎





忠勇  
助入



牧谷軍兵衛

以心  
美以



朝比奈藤兵衛



直哉此人  
兼重於金



黑松忠右衛門

忠勇太公暴  
知者明白之



判及物喜六衛

獄門在兵衛



抱朴肥遯与物不逐觀道水  
車比風泥塑淵龍畫晝眠谷  
蘭秋吐居士說玄五見頓悟

阿陽 吉田鶴



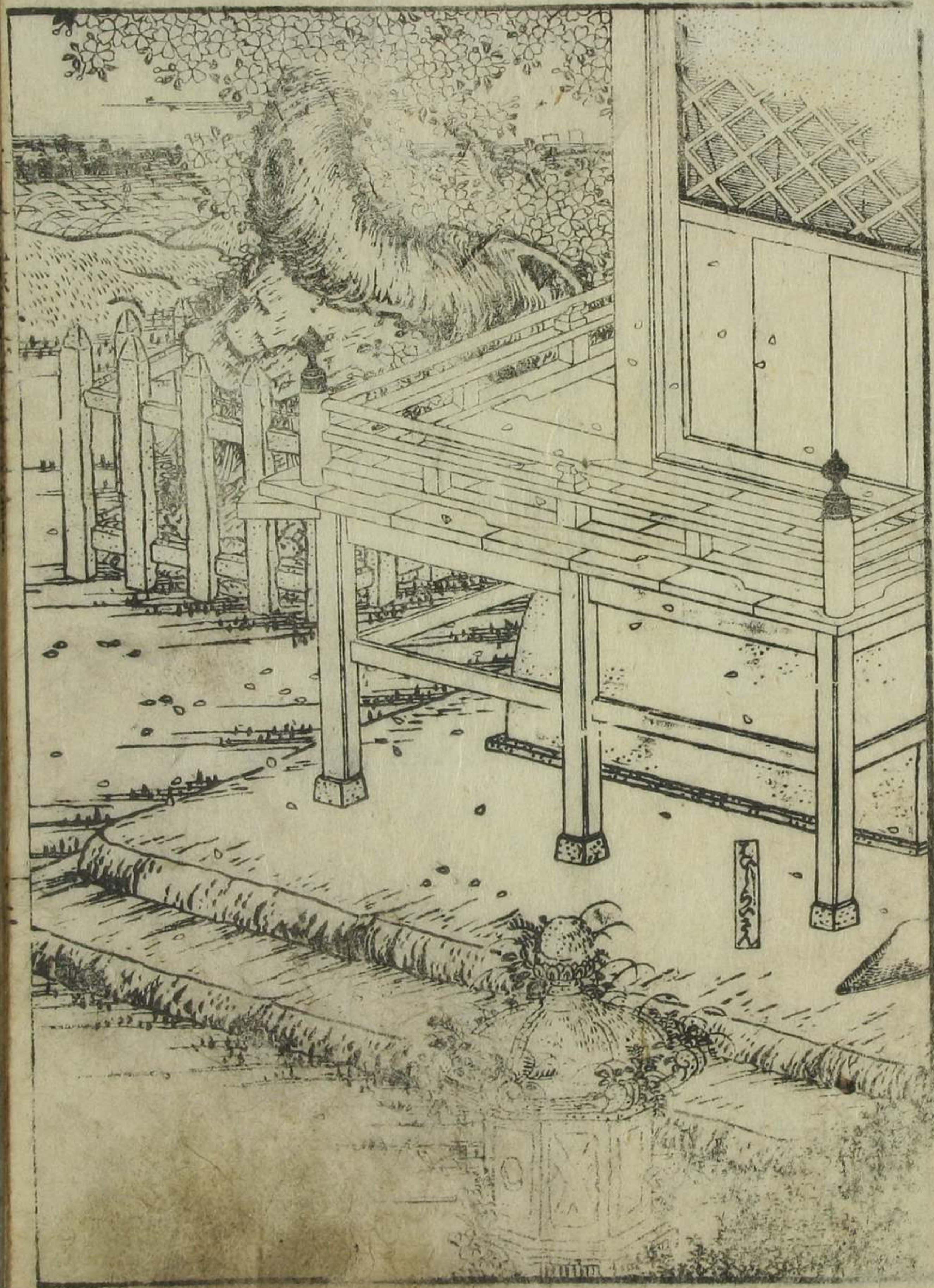
浪華使夫傳卷之壹

發端

遠州依夜中山麓 栗杖亭鬼卯述

惻隱之心仁之端也羞惡之心義之端也辭讓之心禮之端也是  
非之心智之端也此四端ハ人の能志は知らず萬物是より起る  
るはあくは狂言綺語も此四端故教れどこの頃よやあまらん津の國  
今宮の里ふふふ十萬堂來山といひみき誂諧の宗通の教を  
ける日一國伊丹の里に鬼貫堂と名を給て諸人の達人ありける  
むつと師弟の約法あり行通ひゆる小或と來山伊丹へはうし  
おちる鬼貫堂在るありされをよか意なく兼て同一國の久々知山の  
妙見大菩薩と信仰しるをよか序をよかをとりかきたる早  
莫昏の頃小成ぬを今夜ハ拜殿小通夜とて身の幸へ願ふ人





清花侯夫傳卷之三



と神前小頭陀うらとら北辰とひととら祈りて眠りし小  
 丑はのころ御戸帳のいと閑さく妙見菩薩あつれ給へ侍  
 坐勢一敷多の官人の如き者とも各低頭しな来山夢中とい有  
 雞さしやう事や宣ふし息と詰り聞居る北辰御声高く頃日  
 五星天帝れ命小背く事のあぢれを暫く下界下界罪と贖ふ  
 罪し去り人間界下界に放逐する振舞あつむ弥天帝の怒  
 強うく依之我津の國の分野に居る隱徳と施すと天帝に  
 て罷て申聞え夫引立ちあつれを赤色の官人五つの星引立ち  
 くれハ彼星をぶくは何国ともなく去り来山奇突の思ひ法  
 かり北辰と伏拜しと思へば是なん南下の一變ありなり十萬堂要  
 覚くめると詠むれば早東雲の撲雲拜殿ふかの見へく雞鳴た

里をこバ忙然と起りさるるくみ此夢のさぬいりたる由依  
 かりちん其心成あつれれば妙見菩薩小賽して今宮へ  
 せ帰るる

龍藏寺家士抄谷軍兵衛苛政の詔

龍藏寺家士抄谷軍兵衛といふものあり此者生得大欲無  
 道みりて龍藏寺強く其利欲し走勢事至り奸智を  
 近頃太守の庖正官とかりて一家中へ檢約の事と觸るる  
 過役とせり太守の勝手次第に宣しなれをふとく  
 の功ありし慢り派蒼生と取立りて民の困窮いふとなく今  
 ハ般の民よひとく詮方ふれを拾万石の蒼生凌黨とかり強討



志を大に怒らせ給ひ頭取西三人入牢作付しぬらふも成く  
 蒼生恨み怒り數人連下とす一ふく竹籠と指し埋ふよふ  
 軍兵法を敵うや請く日頃の恨と暗さんと一村くく大將と定先  
 此時豊後国日田ふ取の庄官忠た清門といふ者至く正直  
 て人の敬ひる人わりの教は人六十小迫く多病をも日頃の  
 一あれをば忠た清門をりつゝ惣大將とせ八十万石の百姓異儀なく下知  
 人々と評義一歩く此忠た清門村小船越良介とくく大内家  
 の浪人ありく此日田ふ年久しく住く忠た清門が恩澤と教るよと  
 深くぬれを良介つゝ今度の強動と思ふよ前詮上下と隔るぬ  
 是は利非ともあれ始終蒼生頭取の者とも重罪も行ひ人必定  
 也は度忠た清門強訴の首領と多時いふ一令のわらんや我年比

此人の恩威蒙る事海の如く山の如く一殊は忠た清門は多病くそ  
 入牢あつたわらばいくく命のあつた我多年の恩報トふ人よ  
 代らんご公城定免彼奇合の席へ来り衆人よつゝく當村の  
 庄官忠た清門の事強訴の惣大およさんとの評儀一歩致し  
 一美り浪人の某悍といくとも各力へ入るなり忠た清門の  
 老人殊く多病なりを救万人の下知となり首領となる人物  
 わらば其ハ大内家も先祖の采配をも取し者もくくをあり  
 忠た清門の成替り此度の惣大おれ我も作付しぬらふも成く  
 一と惜しと思ふ救谷と引捕し其肉を喰へん事す内は假  
 込んて迷くぬ忠た清門頭と振いやく良介殿思召大は相違  
 我ハ代々庄官の家筋もく多くの百姓を預り支配しは者あり





源氏物語卷之五



此度一件よ生々降るべし存公のく流業ハ致さ次殊は某ハ忠右衛門  
 といふ一子當時他國ハ居れども家の名流過るもあらずこれを其え  
 ハ壯年の勇立身出世あらずさうらふいせり我身又代り給ふべし  
 とうけいけいハ良介海城さうくと流し流有思召心魂は徹し  
 去り此一件ハ御命を失ひ給らん其後ぐぐは何れは度之事  
 終りまは仁政ハ良介一其時御身の如く徳實の君子あくてハ  
 一村細ぐぐは我ハ薄命の艱夫何んぞ死と惜ま人生ハ難し死ハ  
 安しと申せば我ハ任せ給られと泣くいと先々水ハ近村首領の庄官  
 ども詞と揃へ良介殿の至極をあら我ども生々あはれさう  
 存なく後ハ此後領主政道直了し後之事とさば其え生残り  
 我ぐ村方直ハ納給る此上の本望あり良介殿ハ殊ハ勇

士の事孫も是ハ此度のうけ引此上の人もあらず是忠た湯門  
 殿も即存命下されよと一統ハ頼まされを忠た湯門も納得しを  
 終ハ良介殿の御命を貫し申べし思ひ残はなれぬはみ達し系  
 らせんと涙とともよ言われを良介完示と打笑ひ我を親となく親  
 親ともあはれ思ひ残を事更にあくみ只く御長命す仁政あま  
 やしくと進其甲と村へ引とちられ

強詠の者やを刑罪小行つる并石堂清た雷門

異見強勇の語

既小伎黨の者ども簑笠小竹鎧ともち救万人城下へ押寄せられ城  
 下の騒動大うとあはれ親ハ子と捨子ハ親と失ひ誠ハ乱世の大  
 ありりれを國家老大道寺玄蕃馬体兼通し大喜上うと申さる



汝等々誦へり則一理われを何事ふともあれ聞届きとて先誦す  
 くわうくれを徒堂の頭をうり願書と云審へ渡りこれに蓋印見せし  
 御届たをさう公の法も甘し者どもあれを願分の者も方石よと人々  
 残り其外ハ引さるべしせいに渡りあれを悪く覚悟の者ども十人残り  
 誦はかの村へ引さるるに玄叢御前より出り利也と弘し先放谷  
 軍兵備ハ開門許され過役の分ハ免さ勢給以辭謚又御里々々夫  
 願え十人入牢の上謙倉殿 伺以給を如斯強誦の者ゆるし一書に  
 よろし〜罪小行〜と乃令命り々れハ大守も不使〜書に  
 凡そ〜右の極十人の願分小仰り々れを此の〜も悪いれ〜色  
 をか〜我〜ハい〜書の罪は〜とも御仁政の上ハ御も恨〜以〜後  
 此上蒼生を以〜書の御許ハあはかり〜と詞も〜く述々れを

六のくはらなち



